

活動報告

ワークショップ

「竹でデジュリドゥを作ってみよう」

公開公演

「虹の戦士」

講師：坂口 火菜子 & じぶこん

日時：2019 年 1 月 24 日（木）16:10 - 17:40 / 1 月 25 日（金）12:50 - 14:20

場所：愛知県立大学 学術文化交流センター 多目的ホール / 講堂

主催：愛知県立大学多文化共生研究所

使用言語：日本語

参加人数：ワークショップ , 公開公演 124 名

2019.1.24（木曜 4 限）

「竹でデジュリドゥを作ってみよう」（じぶこん）

じぶこんを招聘し、「竹でデジュリドゥを作ってみよう」というワークショップを行った。まずオーストラリア先住民の民族楽器デジュリドゥについてじぶこんの辻岳春による 30 分ほどの簡単なレクチャーがあった。デジュリドゥは現地の言葉でイザキと言い、2 種類ある。二種類とは、男性原理と女性原理のような二元性から構成される世界の要素のことで、例えば虹蛇と入江鰐に代表される。各家系はいずれかの系統に属す（同系統の者とは結婚できない）そうだ。

材料は次のように集める。まず中がシロアリに食われて空洞になっているユーカリの木を切ってきて、成型する。家系ごとに異なるシンボルや描き方のペイントを施す。一つ作るのにかなり手間がかかり、現地で 350 ドルほどで買えるそうだが、日本だとその三倍する。

昔は女性が触れることのできない楽器であり、今でも触

ると妊娠すると言われる（デジュリドゥの長い棒という形状からペニスが想起される）。しかし、現在、外国人なら女性奏者も認められているそうで、じぶこんの近藤裕子も実際デジュリドゥ奏者である。

谷口は 1 月 22 日に知多半島でゼミ学生 4 名とともに内径 3cm、長さ 1 m 10cm の竹を 50 本ほど切り、穴をくりぬいてきた。そこに蜜蝋粘土を口元に塗り、吹く時に痛くないようにして、全員が 1 月 24 日のワークショップで即席デジュリドゥを作った。

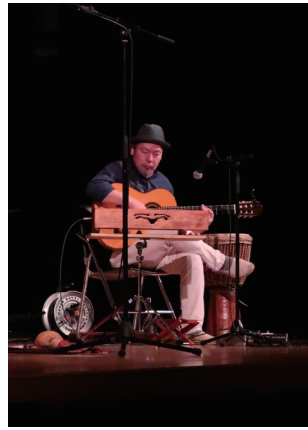
ワークショップはゼミ学生 21 名、他ゼミ学生 4 名、教員 2 名が参加した。即興で作った割には低音が出て、じぶこんからさまざまな吹き方を習った。特に循環呼吸法は難しかった。他に犬の鳴き声をしながら吹く方法、短く音を切りながら息次々方法などもあった。学生たちは、今までに知らなかった民族楽器を自分たちの手で作って吹いてみるということに興味していた。参加した他学科の教員も「面白かった」というコメントを寄せてくれた。

2019.1.25（金曜 3 限）

「虹の戦士」公演（坂口火菜子&じぶこん）

今年で三年目の「虹の戦士」公演。金曜 3 限の「世界の宗教」の参加学生のうち、およそ 90 名、一般参加者 34 名の計 124 名ほどが公演を視聴した。受講生以外に一般参加者が例年になく多かったのは、多文化研究所のみならず、地域連携課の広告宣伝のおかげである。一般参加者から、「こんな素晴らしい劇を（無料で）見せてくれるなんて、県大の懐の深さを感じた」というコメントがあった。





以下、学生や一般参加者のコメントを抜粋して紹介する。およそ96名がコメントを残してくれ、演者の坂口やじぶくん、『虹の戦士』原作者の北村耕平にコピーを送付した。

「最初（坂口さんたちが）東を向いて歌い始めたとき、急に周りの空気が変わって、ネイティブアメリカンの世界の物語の始まりが感じられました。女の人の歌がとてもよく、鳥のさえずりなども楽器で出していることにもリアルすぎて驚きました。“虹の戦士はハートの中に宿っていて、虹の戦士になるにはどんな資格もいらず、自分がそう生きると決断すれば、あなたは虹の戦士なのです”という言葉に感動しました。とても素敵な物語でした。」（中国学科1年）

「少年の気持ちや行動に合わせて演奏の強弱がついたり、音が止まったりしていて、とても緊張感がありました。また、さまざまな楽器によって、大自然の川の流れや動物の動きがイメージ出来て、聞いていて楽しかったです。語りの坂口さんの声が、少年の時と老婆の時と全く別人に聞こえて、臨場感があってすごいと思いました。素敵な公演をありがとうございました。」（歴史文化1年）

「最初の歌の時に東から南、西、そして北へと向きを変えて歌っていくのは、まるで太陽が昇っているみたいだと思いました。語りの中で使われている音は全部その場で出しているのを見て、機械に頼らない姿を見てすごいなと思い

ました。“白人がインディアンの土地を奪うのをなぜスピリットは許したのか”という問いに対して、“白人に必要だった”という答えはとても予想外のものでした。自分も本当に疑問に思っていました。自分は今1960年代の黒人の公民権運動についての本を読んでいて、人種で差別されるという点ではインディアンと同じ部分があるなと思い聞き入りました。自分は白人のフロンティア精神についても興味があって、それをインディアン側から見て、インディアンの気持ちを少し知れたことがとてもうれしかったです。素晴らしい演劇を見せていただき、ありがとうございました。」（英米1年）

「内容はインディアンと白人に関わるものであったが、インディアンの昔の人々の暮らしの様子（昔、女性はすべての子どもの母親であり、男性はすべての子どもの父親であり、一人ぼっちで孤独を感じる子などおらず、年寄りも体の弱い者も見捨てられることなく、皆が互いに協力し合って生きてきた）を聞いて、宗教を学ぶことは昔の人々の平和で人間らしい生き方、本来人は助け合って生きていくべきだという考えを見つめ直すきっかけになるのではないかと思った。現代人の私たちにとって宗教について少しでも知ることが必要な元なのではないかと感じた。」（教育発達3年）（文責：谷口智子）

